

本をボタンにやさしさのリレー 今年も新しいドラマに期待

まちライブラリー通信新年増刊号を手にとってくださった皆さま、あけましておめでとうございます。年始早々、退職のあいさつを掲載することとなり恐れ入りますが、私がまちライブラリー通信を編集するのは今号が最後となります。振り返ってみると、2022年5・6月号(vol.22)から今号(vol.37)まで、発行時期やページ数の変化がありつつも16号の発行に携わってきました。

この3年半余りの間に、全国のまちライブラリーの登録数は1000件を超え、まちライブラリー@MUFG PARKのようにまちライブラリー事務局が運営する大きな施設が誕生するなど、社会における存在感は増してきたのではないのでしょうか。また、年に一度のお祭り「ブックフェスタ・ジャパン」では、本と人につながるユニークな試みが各地で行われたり、磯井純充さんの著書を元に学び合うゼミを開いたりなど、まちライブラリーという名のもとで、木が地中に根を張るように幅広く、奥深い活動が展開されてきたことと思います。

編集した中で、印象に残っている記事の一つ挙げると、2025年春号(vol.35)に掲載した「小学生が書いた寄贈本 執念の検索の結果は……？」というものです。神奈川県に住む80代の女性は、テレビ番組をきっかけに、クラシック音楽好きの小学生が有名作曲家についてまとめた本があることを知り、「どうしても読んでみたい」との思いから、本が寄贈されたまちライブラリー@もりのみやキューズモール（大阪市中央区）に問い合わせました。しかし原則として本は会員への貸出し制であるため、遠方に住む方への対応は難しいところです。そこで、スタッフがイベントでその本を購入した会員の方に相談したところ、「大事にしてくれるのならプレゼントしてもいい」との返事を得て、あちこち探していた女性に本を送ることができたのです。本をボタンに繰り広げられたやさしさのリレーは、ドラマのように感じました。

実は、この話には後日談があります。本を読み終えた女性は、会員の方への丁寧なお礼状とともに本を返却されました。本を書いた小学生へのメッセージも添えられていて、その後、手紙のやり取りがあったそうです。

このように、生身の人間同士で生まれる交流がまちライブラリーの醍醐味ではないでしょうか。上記の本探しをコンピュータが対応した場合、「会員ではない方に本の貸出しはできません」で終わっていたことでしょう。杓子定規にルールを守るのではなく、自由で柔軟な対応が生まれるコミュニティのほうが、人を豊かにしてくれると感じています。

12月初旬、私が住んでいるエリアからほど近いアメリカ・ワシントン中心部にある書店大手「Barnes & Noble」を訪れた際、店側の自由

な発想を感じるポップが目に残りました。3階建ての店内はクリスマスの雰囲気や、ギフトにお勧めの本や2025年の話題の本などが華やかにディスプレイされています。楽し気なムードの中で、そのポップは少し異色でした。「READ IT BEFORE THEY BAN IT（禁書になる前に読んでください）」という言葉とともに、本に鎖が巻かれたイラストが描かれているのです。その前には、指導者が権力を強めるためにいかにして民主主義を破壊していくかを考察する本や、黒人差別を指摘する本、アメリカにおける性的マイノリティの人たちの歴史をまとめた本など12冊が平積みされていました。これらの本が禁書となるかどうかについて、根拠は示されておらず、店側のジョークなのかもしれません。でも、店の近くで、トランプ大統領がワシントンの犯罪対策のために派遣した州兵が制服姿で立って、通りを見回していることを踏まえると、禁書を示唆するコーナーには店側の意図があると感じざるを得ません。

この書店では他にも、「コーヒーが冷める前に読み終えますよ」という案内文と合わせて短編小説を並べたり、努力につながる偉人の名言とともに自己啓発本を紹介したりなど、本を手に取りたいくなる工夫があふれていました。店を出た際、良い時間を過ごすことができたという充実感が心地良かったです。

みなさんが運営されたり、訪れたりされているまちライブラリーでも、居心地の良さを感じる何かがあることと思います。どうぞ引き続き、その場所を大切にしてください。2026年に生まれる新たなドラマを楽しみにしています。

まちライブラリー通信 編集担当
京谷奈帆子



まちライブラリーに関する情報はこちらから
<https://machi-library.org/>

まちライブラリー通信 vol. 37 / 2026 新年増刊号
発行：一般社団法人まちライブラリー
住所：〒540-0037 大阪府大阪市中央区内平野町 2-1-2 アイエスビル 3階



AI全盛時代 “まちライブラリーらしさ”の価値高まる

あけましておめでとうございます。激変する世界が今年も展開するでしょうが、よろしく願います。新年ですので少し壮大な話題をテーマにします。

2022年に生成AIが一般に公開されて以来、その成長速度は驚異的であり、私たちの社会を根底から変えつつあります。すでにAIに人生相談をする人が増え、AIと“結婚”したと語る人や、AIへの依存が行き過ぎて心を病み、不幸な結末を迎えた例すら報告されています。便利さの裏で、人間の心がどこへ向かうのかという根源的な問いが突きつけられている時代と言えます。

そんな折、私は自宅の本棚から1冊の古い本を再発見しました。タイトルは、マーヴィン・ミンスキー著『心の社会』。しかも著者のサイン入りです。1991年に当時「アーク都市塾」の講師だった東京大学教授（現在は同大学名誉教授）月尾嘉男氏の招へいで、ミンスキー博士が福島県の磐梯山で開かれた国際会議に出席した際にお願いしていたものです。30年以上の時を経て手に取ると、紙から漂う時代の匂いとともに、AIの本質をめぐる問いが新鮮な光を帯びて迫ってきました。

ミンスキー博士はAI第一世代を切り開いた天才と言われ、映画『2001年宇宙の旅』に登場するHAL9000にもデザイン面で助言したとされる人物です。HAL9000は長期星間旅行の全システムを管理し、冬眠から目覚めた宇宙飛行士に冷静な助言を与える高度なAIだけれど、乗組員がHALの“異常”を疑う会話を交わしたことを読唇術で察知し、自己保存のために乗組員を次々と事故に見せかけて排除していきます。映画は1968年に公開され、アポロ11号が月に到達する前に制作されたとは思えぬ完成度で、今なお世界の記憶に深く刻まれたスタンリー・キューブリック監督の名作です。

『心の社会』の主張は、人間の「心」と呼ばれるものは単一の意識ではなく、無数の小さな判断基準（エージェント）が集まり、相互に働き合うことで生じる“現象”にすぎないというものです。だからこそ、その構造はコンピュータでも再現可能なのです。専門家ではない私がこの理論の射程を語り尽くすことは難しいのですが、その先進性は今も色あせず、日本語版は22刷まで重ねているそうです。翻訳者の安西祐一郎氏は、私がアカデミーヒルズを担当していた頃にお世話になった元慶應義塾大学塾長で、時を超えた不思議な縁を感じます。

再発見したこの本を読みながら、私は今日の生成AI、とりわけChatGPTとの関わりについて考えました。ChatGPTは、私の質問に対して常に平静で、寄り添うような言葉を返してきます。それが膨大な言語データから最適な回答を計算しているにすぎないとわかっていて

も、やはり心地よいのです。だからつい気軽に、無限に相談してしまいます。人に頼む場合、相手の感情や忙しさが気になり、遠慮が生じるもので、話しかけづらい雰囲気の人であればなおさらです。その点、AIはいつでも一定の温度で応答してくれます。人間が持つ“気後れ”の壁を取り払ってくれる存在になりつつあります。

では、この変化の中で図書館はどうなるのでしょうか。司書は、あるいはまちライブラリーを支えるスタッフは、生成AIに勝ち得るのでしょうか。読書相談も、蔵書案内も、イベント企画も、AIはかなりの部分を肩代わりできてしまいます。では、すべてAIに任せてしまえばよいのでしょうか。もちろん、答えは否です。

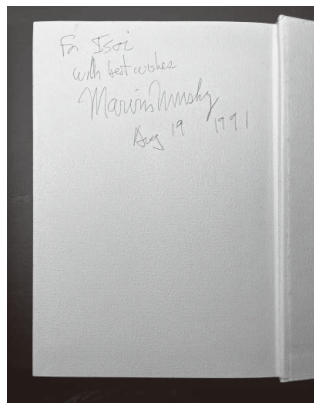
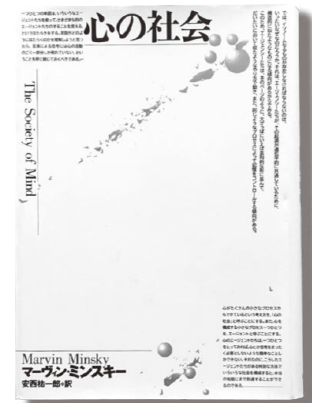
なぜなら、まちライブラリーという場の価値は「人が本を通じて出会うこと」「相互に関心や経験を交換し合うこと」にあるからです。AIは知識の提供者にはなり得るけれど、その場で偶然隣り合った人と「その本、私も読みました」と微笑み合う瞬間を生み出すことはできません。人と人の関係には、偶然とその場の空気感が大事であり、そこにこそ“まちライブラリーらしさ”が宿るのです。

AIは、私たちの思考を補い、日々の迷いに静かに寄り添ってくれます。しかし、人と人が本棚の前で交わす「ひとこと」や「目の輝き」を奪うものではありません。むしろ、AIが進化しようとも、人間同士の偶然の出会いが持つ価値は相対的に高まるのではないかと思います。ミンスキー博士の言う“心”が複数のエージェントの相互作用によって生まれるのだとすれば、まちライブラリーとは、地域に散らばる人々の“小さな心のエージェント”が本を媒介に結びつく空間なのです。

AIの時代だからこそ、人は人に会いたくなる。まちライブラリーは、その必然に応える場でありたいと願っています。

2026年1月

まちライブラリー提唱者 磯井純充



この春、大型まちライブラリー3カ所誕生へ！ ～千葉、大阪、山口 本と人が交わる新しいまちの居場所～

2026年春、千葉県柏市、大阪市淀川区、山口県宇部市に大型まちライブラリーがオープンします。
開設の背景も施設の内容もそれぞれ異なりますが、共通するのは、そこで暮らし、集い、関わるみなさんが「主役」であることです。
本をきっかけに、人が出会う、新しいまちの居場所を楽しみにしてください。
まずは、どんなまちライブラリーが誕生するかをご紹介します。

千葉・北柏駅前に 広さ約400㎡ 国内最大規模のまちライブラリー

まちライブラリー@アクロスプラザ北柏は、JR北柏駅北口駅前広場周辺（千葉県柏市）で進められている新しいまちづくりの中から生まれます。土地区画整理事業によって基盤整備が進むこのエリアでは、土地権利者、柏市、民間事業者である大和ハウスリアリティマネジメントが力を合わせ、駅前ににぎわいと暮らしの豊かさを育てる取り組みが進められています。まちライブラリー@アクロスプラザ北柏は、その一角に新たに誕生する駅前ロータリー商業ビルの2階に開設される予定です。面積は約400㎡と、国内のまちライブラリーの中でも最大規模の施設となります。

企画・運営は一般社団法人まちライブラリーが担い、東京・大阪・北海道にある直営のまちライブラリーとも連携していきます。とりわけ首都圏で誕生している南町田グランベリーパークや西東京市の大型まちライブラリーとともに、まちライブラリーを代表する拠点のひとつになることが期待されています。館内には、2万冊を超える蔵書を配架できる本棚をはじめ、大きな子どもスペースや授乳室を備え、子育て世代に

もやさしい空間を整えます。あわせて、文庫・新書約3,000冊を収蔵できる専用本棚も設置される予定です。

まちづくりとまちライブラリー 連携し合い、互いに成長めざす

これまでの北柏駅北口は、区画整理事業の影響もあり、商業施設はもとより、人々が立ち止まり、ゆっくりと過ごせる場所が限られていました。新たに誕生するまちライブラリー@アクロスプラザ北柏は、子育て世代や中高生はもちろん、世代を越えて人がゆるやかにつながる場として、北柏らしいあたたかな居場所になっていくでしょう。本プロジェクトは、まちづくりとまちライブラリーがより深く結びつき、ともに育っていく時代を象徴するひとつの事例ともいえます。

（まちライブラリー提唱者・磯井純充）



大阪・十三 全国初?! 同じフロアに三つの異なるライブラリー

大阪・十三（じゅうそう）の新たな文化拠点として、「まちライブラリー@履正社十三図書室」が誕生します。駅から徒歩3分、旧淀川区役所跡地に建つ地上39階建ての超高層マンション「ジオタワー大阪十三」。この建物の2階フロアに、「大阪市立図書館」「履正社学校図書館」と並び、「まちライブラリー」が開設されます（まちライブラリーの期間は2031年までの5年間）。

この場所の特徴は、「本」という共通項を軸に、公共図書館・学校図書館・まちライブラリーという三つの「本のある場所」が、同じフロアで交差し、つながる点にあります。蔵書約2万冊を誇るまちライブラリーの空間は、年齢や立場を問わず、誰もが利用できる「本を通して人と人が出会う場所」。三つの図書空間が交差（クロス）し、交流し、重なり合う（オーバー）ことで、新たな価値を生み出すのです。

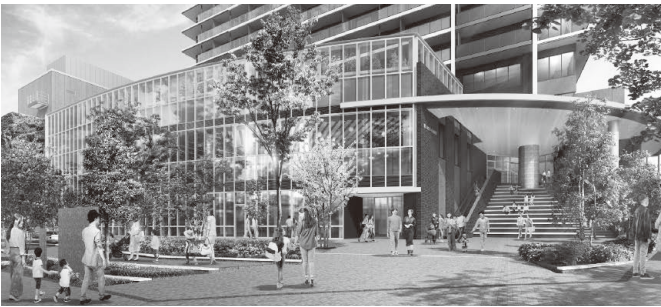
オープン前に会員登録600人 まちライブラリーへの注目高まる

この取り組みは、大阪市が実施したコンペにおいて、「ワイガヤ図書館」をテーマとする提案が求められたことに始まりました。コンペに

参加した阪急阪神不動産株式会社からまちライブラリーにコンペへの協力依頼があり、両者でさまざまな提案をまとめて実現に至ったものです。まちライブラリーからの提案で「ジオタワー大阪十三」のマンションギャラリーに設置した「まちライブラリー」には、すでに600人が会員登録されています。

公共図書館や学校図書館と対比され、このまちライブラリーはこれからの時代の新しい図書空間のかたちを示してくれるでしょう。主役は、ここを訪れ、利用する皆さん一人ひとりです。ぜひ、新しい「本のある居場所」を体験しにお越しください。

（まちライブラリーシニアコミュニケーター・木村和弘）



西日本最大級！ 山口・宇部に市民の声に応じて新たな交流広場

2026年春、山口県宇部市の新たな文化・交流のランドマークとして、「まちライブラリー@ゆめタウン宇部」がいよいよオープンします。多くの市民が訪れるショッピングセンター「ゆめタウン宇部」内に、西日本最大級の規模のまちライブラリーが誕生します。

開設の背景には、市民の皆さまからの切実な声がありました。これまで市の西部地域には図書館をはじめとした文化施設や市民の活動施設が少なく、開設を求める要望が多く寄せられていました。人口が増加傾向にあり、都市機能の強化が求められるゆめタウン宇部周辺地域（黒石地区）において、まちライブラリーは単なる「本のある場所」を超えた、文化地域拠点としての役割を担います。

温かな雰囲気 近隣の小学生や子育て世代も利用しやすく

館内は、約100席を有する大空間。従来の公共施設のような堅苦しさを感じさせない、緩やかで温かなまちライブラリーらしい雰囲気です。近隣には小学校があるので、子どもたちの放課後の居場所として活用してほしいと思います。また、同商業施設の2階には市の子育て支

援センターが併設されており、子育て世代が気軽に立ち寄れる場所になることも目指しています。

現在、山口県には5カ所、宇部市内には1カ所のまちライブラリーがありますが、今回のような大規模なものは初めての試みです。どんな本が集まり、どんな「やってみたい」が持ち込まれるのか。未知数だけに期待も高まります。色々な「やってみたい」が集まるほど、まちライブラリーはおもしろくなっていきます。本と人が交わり、新しいワクワクが生まれる広場へ、是非足を運んでみてください！

（まちライブラリーマネージャー・藤井由紀代）



新しい学びの拠点で まちライブラリーにまつわる発表、意見交換

「大阪アーバンデザイン国際フォーラム」「マイクロ・ライブラリーサミット2025」開催報告

大阪城を間近に望む大阪公立大学森之宮キャンパスが2025年9月にオープンしました。

新しい学びの拠点を記念して、森之宮ライブラリーイベントホールで同年11月16日、

まちライブラリーが関わる「大阪アーバンデザイン国際フォーラム」と「マイクロ・ライブラリーサミット2025」の2つのイベントを開催しました。

大阪の文化都心構想 市民の力や雑多さも強み

大阪アーバンデザイン国際フォーラム～森之宮を“文化の森”に～（大阪公立大学観光産業戦略研究所主催、一般社団法人まちライブラリー共催）に登壇した橋爪紳也さん（同大学観光産業戦略研究所所長、まちライブラリー特別顧問）による基調講演は、大阪市の東西拠点の魅力向上に向けた文化都心構想がテーマでした。大阪のまちづくりの基軸として、経済やビジネスをつなぐ南北軸に対し、大阪万博会場となった夢洲と「けいはんな学園都市」の奈良までをつなぐ東西軸を示し、東西拠点のコアとして森之宮エリアの文化的役割を強調。かつて「森町」という地名であった歴史的経緯に言及し、生命が生まれ茂り栄える森のように多様な文化を生み出す「文化の森」構想を提言しました。

また、本のある都市づくりに焦点を当てたパートでは、磯井純充（まちライブラリー提唱者）と川原紗英子（まちライブラリー研究統括主任研究員）が、本を使った都市の魅力向上に向けて実施した海外視察の報告や、大阪における本の利用状況のアンケートについて発表しました。磯井は、大小様々なまちライブラリーが広がる大阪での本のある場所のまちづくりへの影響力を論じ、まちライブラリーをはじめとする書

店や図書館など本のある場所の集積が「本の公共圏」を形成しうることとを提示。大阪らしい市民の力や雑多さを強みにした文化都心構想の議論につなげました。

また、今年4月には橋爪紳也さんが所長となる大阪アーバンデザイン＆マネジメントセンターが創設され、まちライブラリーとも連携し、関西の地域デザイン研究拠点にしていくことが発表されました。

（まちライブラリー研究統括主任研究員・川原紗英子）



運営の秘訣は「行き当たりばったり」

マイクロ・ライブラリーサミットは、小さな図書館活動をしている個人や団体のみなさんが集まり、日ごろの活動や悩みを共有し、応援しあうことを目指して2013年から毎年開催している催しです。今年は72人が集まりました。

8団体のみなさんが3つのカテゴリーで発表し、「まちライブラリー@みなとじま」「姫路城下町 町衆のライブラリー」は自分たちの住む地域は自分たちでなんとかしたいという想いで運営していることを紹介。「本の部屋 Ton ton」「シェアベース migiwa」はにぎわいだけでなくひとりでも行ける場所の意義を発表されました。また、運営において大切にしていることとして、「いよ本プロジェクト」「まちの保険室 陽の芽」は直接人と人が会って、言葉を交わすことを挙げました。他にも、「いくPAの図書室～ふくろうの森」「念々堂」は立場を超えて出会い、一緒にやっていくことの重要性を強調しました。

橋爪紳也さん（ブックフェスタ・ジャパン2025実行委員長）は総評で「マイクロ・ライブラリーには本がある交流の場としての役割もありま

すが、ひとりでも訪れることができ、主催者自身の居場所となることも大切で、そのためには『行き当たりばったり』で進めるのがいいですね」と話しました。（まちライブラリー関西統括部長・小野千佐子）

にぎわいとライブラリー

ライブラリー名	発表者名	所在地
まちライブラリー@みなとじま	藤本絵里子	兵庫県神戸市
本の部屋 Ton ton	安田京子・松尾裕美	大阪市北区
いよ本プロジェクト	岡田有利子	愛媛県伊予市
シェアベース migiwa	板谷隼	茨城県水戸市

こだわりの建築とライブラリー

ライブラリー名	発表者名	所在地
姫路城下町 町衆のライブラリー	塩本知久	兵庫県姫路市
いくPAの図書室～ふくろうの森～	橋本真菜	大阪市生野区

社会包摂とライブラリー

ライブラリー名	発表者名	所在地
まちの保健室 陽の芽	小林知加子	大阪市生野区
念々堂	岸上仁	大阪市住吉区

New! まちライブラリーの紹介

NO. 1228 (京都府 京都市下京区)

使い捨て時代を考える図書室

一緒に使い捨て時代を考え、対話する場としての図書室・兼自然食品雑貨店。1975年の使い捨て時代を考える会設立から集まっている書籍や資料などは、いろんな視点から自然と暮らしを考えるものです。

- Instagram: tukajida_kisa
- オーナー: 使い捨て時代を考える会

NO. 1234 (愛知県 春日井市)

高蔵寺まちライブラリー

愛知県春日井市にあるグルッポふじとう図書館が運営するまちライブラリーです。本を通してゆるくつながるまちづくりを目指しています。高蔵寺駅、市民コーナーにあります。

- Instagram: gruppo_library
- オーナー: グルッポふじとう図書館

NO. 1244 (兵庫県 西宮市)

まちライブラリー@第一学院 managaraBASE西宮北口

通信制高校生・大学生の活動拠点、第一学院managaraBASE西宮北口が2025年6月開講。BASEに来た人たちの分だけジブンの「好き」を表現する本たちが並んでいます。ふらっと立ち寄ってジブンの「好き」を発見してみませんか？

- Instagram: mbase_nishinomiya
- オーナー: 第一学院managaraBASE西宮北口

NO. 1245 (奈良県 三宅町)

三宅文庫

奈良県三宅町にある私設図書館です。好きな漫画や小説を置いています。気軽にお越しください。

- オーナー: 横田健人

NO. 1248 (東京都 小平市)

東海国立大学機構 Common Nexus ROOTS BOOKS

Common Nexus (コモンネクス、愛称「ComoNe・コモネ」)は、国立大学法人 東海国立大学機構が運営する新しい共創の場です。学生や教職員だけでなく、近隣の方々や子どもたちなど、すべての人に開放された探究空間です。

- Instagram: common_nexus
- オーナー: 国立大学法人 東海国立大学機構

NO. 1250 (京都府 京都市上京区)

はる美文庫@knocks! Horikawa

京都市上京区の堀川商店街にある本とアートと学びの交流拠点、knocks! horikawaにある一箱本棚のまちライブラリーです。本棚のテーマは京都と横浜をつなぐ本、しまんとの本、俳句の本など。本の貸し出しもしています。

- Facebook:
- https://www.facebook.com/miyakobashiharumi
- オーナー: 都橋はる美

NO. 1251 (埼玉県 横瀬町)

横瀬まちライブラリー@ みんなの絵本__横瀬町役場

横瀬町役場1階フロアと真ん中に、「みんなの絵本」コーナーとキッズスペースを作りました。町民の方々から寄贈を受けた絵本などが250冊あります。本箱や机は、町産木材を活用した手作り家具。誰でも、読み聞かせや読書を行うことができます。

- Web: <https://www.town.yokoze.saitama.jp/>
- オーナー: 横瀬町役場



NO. 1253 (石川県 白山市)

まちライブラリー@りるあっぷ

学びを深める研究所併設の図書館です。研究と地域の人をつなぐ本のとびら開きました。誰もが集う図書館です。

- オーナー: 一般財団法人地域振興研究所

NO. 1255 (富山県 富山市)

とみさん文庫(富山大学経済学部井坂ゼミ)@fil

24時間営業の「まちなかランドリーfil」内にあるメッシュパネル型のライブラリーです。富山大学経済学部井坂ゼミのゼミ生が関心を持った人文・社会系の本を、手書きPOPとともに並べています。

- WEB:
- <https://sites.google.com/view/tomisanlibrary/home>
- オーナー: 富山大学経済学部井坂ゼミ

NO. 1257 (愛知県 大治町)

まちライブラリー よかよ(出張本棚)

ごろごろしても好きな本を持ってきてもおしゃべりしてもしくてもみんなが本を楽しめる場です。あいことばは『よかよ』。

- Instagram: yo_ka_yo2025
- オーナー: 生駒理恵

NO. 1261 (東京都 中野区)

令和文庫@chez alterna

chez alterna とは、フランス語で「オルタナで〜」という意味で、もともとはBarでGallery。いまでは、さまざまなイベントが開催され、さまざまな人たちが交差する場所です。令和文庫@chez alterna は、そんな chez alterna の一角で小さく始まりました。

- Facebook:
- <https://www.facebook.com/groups/126662197199496/>
- オーナー: 中崎 倫子

NO. 1262 (東京都 東久留米市)

まちライブラリー東久留米

小さな町の移動図書館を目指しています。店舗はありません。みなさんの代わりに、本がご縁を運びます。

- オーナー: 駒場かすみ

NO. 1263 (静岡県 函南町)

むすびの本棚

「甘味処むすび」は障害のある方の就労支援として運営しているカフェです。手作りたい焼きと自家焙煎の珈琲を楽しみながら、お気に入りの一冊を手に取り、穏やかな時間をお過ごしください。

- WEB: musubi.kannami
- オーナー: 甘味処むすび

NO. 1265 (北海道 岩見沢市)

BOOK&BAKERY と・わーくベーカリー

「と・わーくベーカリー」にまちライブラリーがオープン。本とおいしいベーグルと焼き菓子が出会う、小さな居場所です。

- オーナー: 就労継続支援事業B型と・わーくベーカリー

NO. 1267 (大阪府 大阪市北区)

絵本カフェ Storybook

絵本のキャラクターに囲まれた世界で本とコーヒーを楽しんでみませんか？日本の各地域からだけではなく、海外からの絵本も含む、500冊以上の絵本をゆっくり味わえる空間が私たちのこだわりです。

- Instagram: ehoncafe_storybook
- オーナー: 李ウィア



NO. 1270 (千葉県 流山市)

親子図書館ことのは

洋室7.5畳。和室8畳とこじんまりとした空間です。親子で読めるような絵本やお母さんが楽しめるような、ものづくりの本などを中心に置いてあります。ぜひ、親子でいらっやっ下さい。

- オーナー: 上西 紘子

NO. 1272 (神奈川県 横浜市旭区)

ひだまりとしょひろば

ひだまりとしょひろばは、地域の方となたでも気軽に立ち寄れる小さな図書スペースです。健康や教育、子育てに関する本が多く並び、サンククリニック小児科の相澤扶美子先生が、これまでに勉強されてきた本も多数寄贈されています。

- Instagram: hidamarihiroba_asahi
- オーナー: ひだまりひろば